

地方私立大学生アスリートの相談行動

—— 相談に対するイメージと相談行動の関係に焦点をあてて ——

内 城 寛 子

平成 28 年 11 月 2 日受理

Consultation Behavior of Local Private College Student Athletes : focusing on relationship
between consultation behavior and impression of consultation behavior

Hiroko UCHIJO

目 次

1. はじめに
 2. 問題と目的
 3. 方法
 4. 結果
 5. 考察
- 参考・引用文献

1. はじめに

わが国では、2000年6月に文部科学省が「大学における学生生活の充実方策について(報告—学生の立場に立った大学づくりを目指して—)」を発表して以降、大学教育の一環として学生支援の立場から学生相談の充実が図られてきた。学生の価値観も多様化する中、学生相談の必要性は増し、その役割期待は高まっている。

2007年に独立行政法人日本学生支援機構がまとめた報告では、家族や友人、異性との対人関係に関する相談や進路・就職に関する相談、経済的問題等に関する相談が寄せられていることの実態を示しており、同様の結果が各大学相談機関より複数報告されている。その背景には、大学・短期大学への進学率の向上と多様な価値観を持った学生の入学があること(文部省高等教育局2000)や、IT化による連絡通信の在り方の変化、世代間の境界が曖昧な「一卵性親子」のような家族関係の変化(福島2000)がある

とされ、学生の抱える問題に広がりが出てきたことがあると考えられている。

しかし、学生生活の中心にスポーツ活動を据え、ある意味特別な環境で学生生活をおくる大学生アスリートの支援については、これまで深く言及されておらず、大学生アスリートの抱える不安や問題、その背景については不明な点が多い。これまで、大学生アスリートの団体活動支援は、各大学や大学運動部同士のつながりを組織した学連、または競技団体における自発的な取り組みに任されてきたのが実態で個人が抱える不安や問題についての受け皿は、不特定の個人であった。このような社会の中で各方面からの要求を受け、大学組織内の部署で、大学生アスリート個人が抱える不安や問題の受け皿となり得る機関を全国に先駆けて設置したのが、筑波大学(平成5年～)や大阪体育大学(平成15年～)の大学生アスリートを対象とした相談室である。そのうちの大阪体育大学では、学生相談室と連動したスポーツカウンセリング

ルームを設置して専門カウンセラーが相談を行っており、平成25年の利用が250件、平成27年には316件の利用があったことが報告されている。主訴は「競技に関すること」や「将来に関すること」、「対人関係（家族、集団への適応など）」等であり、大学生アスリートの不安を受容する窓口となっていることがわかる。具体的な相談事例として土屋他（2007）は、「競技成績を高く評価されて、勧められるままに推薦入学したものの「体育大学」の授業は面白くないし、体育教員を目指す周囲の同級生たちにも打ち解けられない。そういう状況を理解してくれる人間関係も築けそうにない」と話した大学生アスリートの心情を挙げており、大学生アスリートが不安や心理的負担を吐露できる場所の重要性を示している。

スポーツは心身の発育・発達上に効用を認めながらも、常に勝利を目指して競技生活に多くの時間を費やすハイレベルの競技者にとっては心理的負担が大きい。健全な人間の成長に悪影響があることを懸念する論文（石山1995）やスポーツ障害・傷害、燃え尽き現象、逸脱現象等の増大、主体性の減少等の具体的問題について指摘する報告が認められることから、大学生アスリートの不安や心理的負担をめぐる問題は小さくないことがわかる。

一方で、今後の我が国のスポーツ政策は、大学を中心拠点としアスリートの競技力向上支援事業や、経済分野や地域創生の視点からスポーツ環境活性化をめざした事業等が推進され（スポーツ庁・経済産業省（2016）、文部科学省（2013, 2014）、今後、大学生アスリートの活躍に益々期待が寄せられている。そのような状況下においては、大学生アスリートの心理的負担を軽減するような支援の取り組みを検討する重要性は増すと考えられる。

そこで、本研究では、勉学と競技力向上を目指す大学生アスリートの精神的消耗やQOL（生活の質）の低下を防ぐ取り組みとして、大学生アスリートの相談行動の実態について調査し、今後の大学生アスリートの学生支援の方向性を

探りたいと考える。

2. 調査目的

本研究は、東北地方私立大学に在学する大学生アスリートを対象として、学生生活および競技生活における相談行動の実態について調べられることを目的に調査を行った。また、実際の相談行動が日常生活や競技場面のコンディショニング充実度にもどのように影響しているのか、また、「相談」に対するイメージが相談行動の有無にもどのように影響しているのか実態に迫りたいと考える。

3. 方 法

1) 調査対象と調査時期

調査は、東北地方私立大学に在籍する学生で「スポーツ心理学講義」、「運動生理学」及び「卓球実技」の授業を受講する123名（男子101名、女子22名）を対象に2016年6月に実施した。授業の冒頭、調査の趣旨を説明した後、調査用紙を配布し、回答協力した121名から回収（回収率98.4%）した。回答に不備があったもの（欠損、多重回答）や非運動部員を除いた106名（男子88名（83%）、女子18名（17%））を対象に分析を行った。

2) 調査内容

(1) フェースシート：性別、学年、年齢、競技経験年数、居住形態など

(2) 日常生活に関する相談行動：学業・成績、体調、経済面、友人関係、恋人関係、家族関係、就職活動、生活全般の8項目それぞれについて相談する相手を尋ね、（家族、学内の友人、大学以外の友人、大学教員・職員、部活動指導者、その他、相談しない）から複数回答を求めた。

(3) 競技生活に関する相談行動：技術、体力、怪我、メンタル、食事、日程調整、用具、競技生活全般の8項目それぞれについて相談す

る相手について尋ね、(監督・コーチ, 医師・トレーナー, 家族, 部内の友人・先輩, 部外の友人・先輩, その他, 相談しない) から複数回答を求めた。

(4) 日常生活のコンディショニング充実度: 学業・成績, 体調, 経済面, 友人関係, 恋人関係, 家族関係, 就職活動, 生活全般の8項目それぞれについて4件法(4. とてもうまくいっている~1. まったくうまくいっていない)で回答を求めた。

(5) 競技生活のコンディショニング充実度: 技術, 体力, 怪我, メンタル, 食事, 日程調整, 用具, 競技生活全般の8項目それぞれについて4件法(4. とてもうまくいっている~1. まったくうまくいっていない)で回答を求めた。

(6) 「相談」に対するイメージ調査: 森田(2003)によって作成された「相談すること」の意味づけ調査の50項目をそのまま用い, それぞれ4件法(1. まったく当てはまらない~4. とてもよく当てはまる)で回答を求めた。どうしても判断がつかない場合のみ(0. よくわからない)を選択してもよいこととした。

3) 統計処理および分析

SPSS for statistics24 を用いて分析を行った。

4. 結 果

1) 競技活動の実態

分析対象となる大学生アスリートの平均年齢は19.73歳(SD=0.87)(男子19.75歳(SD=0.86), 女子19.61歳(SD=0.91))で, 競技経験平均年数は11.14年(SD=2.92)(男子11.27年(SD=3.01), 女子10.50年(SD=2.43))である。生活形態をみると「親と同居している」が10人(9.4%),「寮生活」が46人(43.4%),「アパート生活」が48人(45.3%)であった。また全体の94.3%が6年以上競技活動を継続しており, そのほぼ全員がここ最近「ほぼ毎日練習している」状態だった。そのうちの約半数の48%が「かなりハード」もしくは「ややハード」

な活動をしていると回答した。競技種目は野球, ハンドボール, バスケットボール, サッカー, バレーボール, バドミントン等複数の競技にまたがっている。

2) 相談行動実態について

日常生活に関する相談行動についての結果を図1に示す。大学生アスリートの約8割が「家族関係」以外の「学業・成績」「体調」「経済面」「友人関係」「恋人関係」「就職活動」「生活全般」について「誰かに相談する」と回答した。相談相手は, 表1に示すとおり主に「家族」「学内の友人」「学外の友人」であり, 大学教員や職員または部活動指導者に相談する人はごく少数であった。

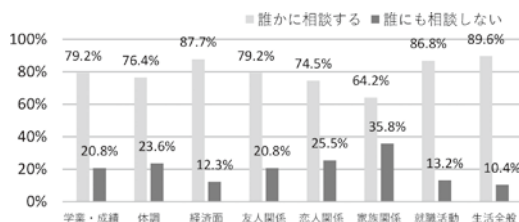


図1 日常生活における相談行動

次に競技生活に関する相談行動についての結果を図2に示す。各項目についてばらつきがみられたものの, 学生アスリートの6割~8割が競技生活に関する「技術」「体力」「怪我」「メンタル」「食事」「日程調整」「用具」「総合的」について「誰かに相談する」と回答した。中でも「怪我」と「技術」に関しては約9割が「誰かに相談する」と回答し, 高い割合で相談行動

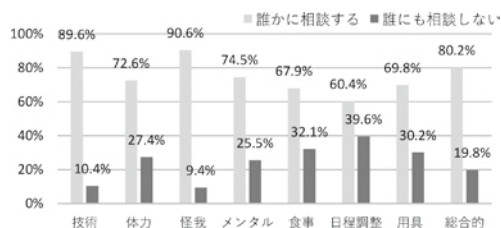


図2 競技行動における相談行動

表 1 日常生活における相談相手

	家族	学内の友人	学外の友人	教員・職員	部活指導者	相談しない	その他
学業・成績	45	38	13	6	3	22	0
	42.5%	35.8%	12.3%	5.7%	2.8%	20.8%	0.0%
体調	48	42	10	2	4	25	0
	45.3%	39.6%	9.4%	1.9%	3.8%	23.6%	0.0%
経済面	80	14	7	1	2	13	0
	75.5%	13.2%	6.6%	0.9%	1.9%	12.3%	0.0%
友人関係	13	61	33	0	0	22	0
	12.3%	57.5%	31.1%	0.0%	0.0%	20.8%	0.0%
恋人関係	14	52	35	0	1	27	1
	13.2%	49.1%	33.0%	0.0%	0.9%	25.5%	0.9%
家族関係	40	26	10	0	2	38	1
	37.7%	24.5%	9.4%	0.0%	1.9%	35.8%	0.9%
就職活動	62	31	22	8	13	14	1
	58.5%	29.2%	20.8%	7.5%	12.3%	13.2%	0.9%
生活全般	72	36	17	1	5	11	0
	67.9%	34.0%	16.0%	0.9%	4.7%	10.4%	0.0%

表 2 競技活動における相談相手

	監督・コーチ	医師・ トレーナー	家族	部内の友人・ 先輩	部外の友人・ 先輩
技術	33	8	9	64	14
	31.1%	7.5%	8.5%	60.4%	13.2%
体力	20	9	8	53	8
	18.9%	8.5%	7.5%	50.0%	7.5%
怪我	20	47	22	40	8
	18.9%	44.3%	20.8%	37.7%	7.5%
メンタル	11	4	22	52	11
	10.4%	3.8%	20.8%	49.1%	10.4%
食事	8	9	33	35	4
	7.5%	8.5%	31.1%	33.0%	3.8%
日程調整	16	4	14	31	7
	15.1%	3.8%	13.2%	29.2%	6.6%
用具	13	2	40	29	4
	12.3%	1.9%	37.7%	27.4%	3.8%
総合的	18	9	31	56	12
	17.0%	8.5%	29.2%	52.8%	11.3%

を行っていることが示された。相談相手は、表2に示すとおりで、「怪我」について「医師やトレーナー」に相談する割合が44.3%、「用具」については「家族」に相談する割合が37.7%だった。それ以外の項目に関しては「部内の友人や先輩」に相談する割合が高いことが認められた。

3) コンディショニング充実度について

日常生活に関するコンディショニング充実度を図3に示す。「とてもうまくいっている」または「まあまあうまくいっている」と答えた割合が高かった項目は、「家族関係」で98.1%、次いで「友人関係」93.4%、「生活全般」86.8%だった。反対に「とてもうまくいっている」「まあまあうまくいっている」と答えた割合が低かった項目は、「就職活動」39.6%、「恋人関係」43.4%、「経済面」57.5%で、項目間にばらつきがみられた。

また、日常生活に関するコンディショニング

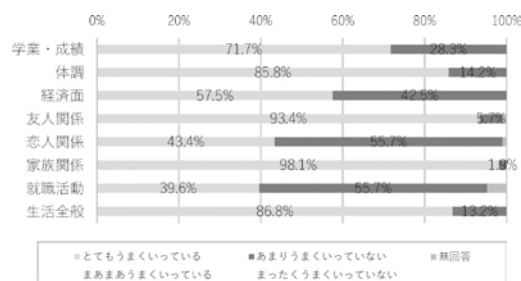


図3 日常生活におけるコンディショニング充実度

充実度の項目間では、多くの内部相関が認められ（表3）、特に「生活全般」についてはいずれの項目においても優位な相関があり（1%水準）、「生活全般」の評価がそれぞれの項目の評価傾向を示すことが示唆された。

次に競技生活に関するコンディショニング充実度を図4に示す。「とてもうまくいっている」または「まあまあうまくいっている」と答えた割合が高かった項目は、「用具」で84.9%、次いで「総合的」が73.6%だった。反対に「とてもうまくいっている」「まあまあうまくいっている」と答えた割合が低かった項目は、「技術」で59.4%、「怪我」で50.9%、「メンタル」57.9%、「食事」66.0%、「日程調整」68.9%、「用具」84.9%、「総合的」73.6%。

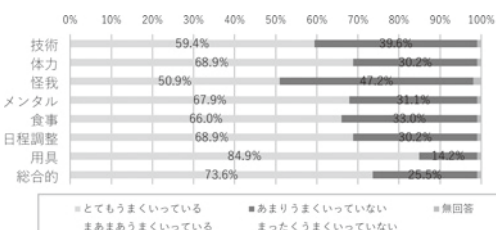


図4 競技活動におけるコンディショニング充実度

また、競技生活に関するコンディショニング充実度の項目間でも多くの内部相関が認められ（表4）、「総合的」についての項目がいずれの項目とも優位な相関があり（1～5%水準）、「総合的」の評価がそれぞれの項目の評価傾向を示すことが示唆された。

さらに、日常生活と競技生活のコンディショ

表3 日常生活におけるコンディショニング充実度の内部相関

	学業・成績	体調	経済面	友人関係	恋人関係	家族関係	就職活動	生活全般
学業・成績	-	.236*	.213*	.027	.211*	-0.039	.330**	.300**
体調		-	.424**	.412**	.353**	.306**	.344**	.497**
経済面			-	.185	.276**	0.141	.280**	.455**
友人関係				-	.205*	.402**	0.018	.364**
恋人関係					-	.12	.472**	.396**
家族関係						-	.088	.278**
就職活動							-	.329**
生活全般								-

* $p < .05$ ** $p < .01$

表4 競技活動におけるコンディショニング充実度の内部相関

	技術	体力	怪我	メンタル	食事	日程調整	用具	総合的
技術	—	.700**	.170	.556**	.358**	.531**	.228*	.680**
体力		—	.103	.421**	.426**	.504**	.296**	.593**
怪我			—	.116	.091	.145	.000	.239*
メンタル				—	.366**	.468**	.219*	.467**
食事					—	.515**	.321**	.511**
日程調整						—	.366**	.672**
用具							—	.375**
総合的								—

* $p < .05$ ** $p < .01$

ニング充実度のそれぞれの合計点の相関は1%水準で有意であることが示され、日常生活と競技生活のコンディショニング充実度は比例していることが明らかになった。

4) 「相談」に対するイメージ調査の因子分析

回答に不備がなく、因子分析の対象者となった48名の内、65%以上が「相談することのイメージ」として「まったく当てはまらない」と答えた11項目を除き、39項目の回答を用いて因子分析(主因子法,バリマックス回転)を行った。結果,固有値の減衰状況(14.88, 6.13, 2.41, 1.84…)から2~4因子の範囲で比較検討し,解釈可能性から3因子解を採用した(累積寄与率56.2%)。回転後の因子負荷量は表5に示すとおりである。第I因子は、「信頼すること」「役に立つこと」「真剣になるということ」「自分をさらけ出すこと」など21項目で構成され、<相談への信頼と自己受容感>と命名した。第II因子は、「わがままなこと」「暗い感じがすること」「かたぐるしいこと」「大げさなこと」など12項目で構成され、<自己中心性への回避の姿勢>と命名した。第III因子は「気軽にできること」「面白いこと」「特別なこと」など6項目で構成され、<相談への肯定的関心>と命名した。 α 係数は、それぞれ.96, .90, .80であった。

5) 相談行動の違いにおける「相談」に対するイメージの差について

「相談」に対するイメージ調査で得られた3つの因子の下位項目の素点を加算した後、項目数で割り各因子の個人別平均得点を算出し、(第I因子21項目,第II因子12項目,第III因子6項目)、相談行動の異なる「日常生活相談行動をする群」と「日常生活相談行動しない群」でt検定を行った。

その結果、日常生活の「生活全般」については、第I因子「相談への信頼と自己受容感」、第II因子「自己中心性への回避」、第III因子「相談への肯定的関心」いずれにおいても相談行動の違いによる差は認められなかった(図5)。

また、競技生活の「総合面」については、第I因子「相談への信頼と自己受容感」で1%水準の有意差が、第III因子「相談への肯定的関心」が5%水準で有意差が認められた(図6)。

これらのことから、大学生アスリートは、日常生活においては、相談に対するイメージが相談行動に影響を及ぼしているとは考えられないが、競技生活においては、信頼や自己受容感等の肯定的なイメージを持っている人が相談行動を行っているという結果から相談に対するイメージが相談行動に影響を及ぼしていることが明らかになった。

表5 「相談」に対するイメージの因子分析

項目	I	II	III
<相談への信頼・自己受容感>			
相談価値 12 信頼すること	0.871	0.020	-0.035
相談価値 14 役に立つこと	0.859	0.001	0.080
相談価値 25 真剣になること	0.818	0.200	0.010
相談価値 16 自分をさらけ出すこと	0.806	0.066	0.179
相談価値 22 安心できること	0.798	0.038	0.184
相談価値 13 親しみの持てること	0.784	-0.008	0.186
相談価値 15 楽になること	0.766	0.123	0.128
相談価値 26 温かさを感じる	0.738	0.329	0.233
相談価値 34 頼りになること	0.714	-0.083	0.277
相談価値 1 心強いこと	0.711	0.147	0.195
相談価値 11 必要なこと	0.708	-0.170	0.226
相談価値 23 救われること	0.688	0.376	0.147
相談価値 35 自分を高めること	0.657	0.018	0.300
相談価値 2 優しさを求めること	0.655	0.344	0.130
相談価値 46 貴重なこと	0.645	-0.015	0.301
相談価値 5 興味深いこと	0.629	0.029	0.383
相談価値 47 受容れてもらうこと	0.619	0.030	0.505
相談価値 24 身近なこと	0.618	0.023	0.396
相談価値 37 大切なこと	0.596	-0.008	0.135
相談価値 36 うれしいこと	0.588	0.041	0.566
相談価値 45 有意義なこと	0.526	0.167	0.376
<自己中心性への回避>			
相談価値 27 わがままなこと	0.010	0.849	0.051
相談価値 28 暗い感じがすること	0.101	0.838	0.030
相談価値 29 かたぐるしいこと	0.020	0.834	-0.016
相談価値 20 大げさなこと	-0.131	0.765	0.157
相談価値 19 恥ずかしいこと	-0.095	0.756	0.100
相談価値 44 身構えてしまうこと	-0.030	0.730	0.160
相談価値 9 勇気のいること	0.356	0.618	-0.007
相談価値 18 迷惑をかけること	0.077	0.593	0.229
相談価値 10 期待できないこと	-0.202	0.573	0.388
相談価値 7 弱みを見せること	0.384	0.569	-0.069
相談価値 6 最後の手段	0.319	0.524	-0.153
相談価値 17 不安なこと	0.284	0.495	0.366
<相談への肯定的関心>			
相談価値 3 気軽にできること	0.349	0.019	0.674
相談価値 48 面白いこと	0.015	0.228	0.593
相談価値 49 特別なこと	0.416	0.101	0.560
相談価値 4 居心地のいいこと	0.454	0.145	0.536
相談価値 50 他者との交流	0.372	0.080	0.463
相談価値 33 味方が得られること	0.401	0.190	0.449
因子間相関 II	.234 ⁺		
III	.688 ^{**}	.298 [*]	

⁺p<.10 ^{*}p<.05 ^{**}p<.01

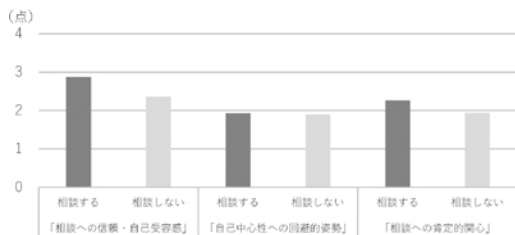


図5 日常生活の「相談行動」の違いが与える「相談」に対するイメージ得点差

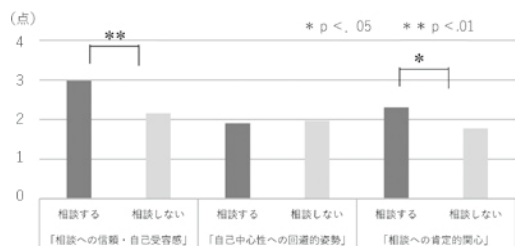


図6 競技生活の「相談行動」の違いが与える「相談」に対するイメージ得点差

6) コンディショニングの充実度と「相談」イメージの関係について

コンディショニングの充実度と「相談」イメージの関係について表6に示す。

「学業・成績」「体調」「経済面」「友人関係」「恋人関係」「家族関係」「就職活動」「生活全般」8項目の充実度得点の合計からなる日常生活コンディショニング充実度得点と相談に対するイメージの3因子との相関を調べた結果、第I因子「相談への信頼・自己受容感」との間で1%水準の正の相関が認められ、第III因子「相談への肯定的関心」との間で10%水準の正の相関の優位傾向が認められた。

また、「技術」「体力」「怪我」「メンタル」「食

事」「日程調整」「用具」「総合的」8項目の充実度得点の合計からなる、競技活動コンディショニング充実度得点と「相談」に対するイメージの3因子との相関を調べた結果、第I因子「相談への信頼・自己受容感」との間で1%水準の、第II因子「自己中心性への回避的姿勢」との間で5%水準の優位な正の相関が認められた。

これらの結果から、相談への信頼感や自己受容感が高ければ日常生活も競技生活もおおよそ充実しているということが示され、自己中心性への回避的姿勢が高い方が、競技生活が充実していることが示唆された。

7) コンディショニング充実度と相談行動の関係について

日常生活について全般的に「相談する」と回答した人と「相談しない」と回答した人の日常生活コンディショニング充実度得点の平均点を比較した結果を図7に示す。「相談する」と回答した人の日常生活コンディショニング充実度平均点は23.11 (SD=3.52) だったのに対し、「相談しない」と回答した人の平均点は20.82 (SD

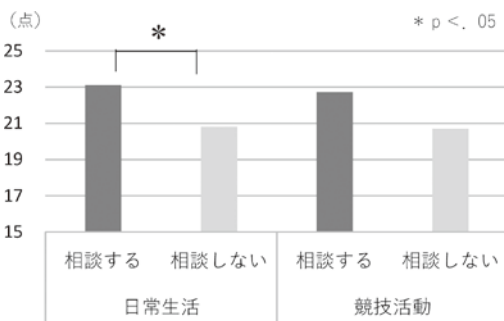


図7 相談行動の違いが与えるコンディショニング充実度への影響

表6 コンディショニング充実度と「相談」イメージの下位因子の相関

	相談への信頼・自己受容感	自己中心性への回避的姿勢	相談への肯定的関心
日常生活充実度	0.380**	0.083	0.232 ⁺
競技生活充実度	0.441**	.278*	0.184

⁺p<.10 **p<.01

= 3.97) で 5% 水準の有意差が認められた。

また、競技生活について総合的に「相談する」と回答した人と「相談しない」と回答した人の競技活動コンディショニング充実度得点平均点を比較した結果も図7に示したとおりである。「相談する」と回答した人の平均点は22.72 (SD=3.38) だったのに対し、「相談しない」と回答した人の平均点は20.71 (SD = 3.45) で有意差は認められなかったものの、「相談する」と回答した人の方が平均点で2点以上得点が高いことが認められた。

これらの結果から、相談行動が日常生活のコンディショニングの充実度に影響を及ぼしているといえ、また、競技生活においても相談行動がコンディショニングの充実に影響を及ぼしている可能性があるといえる。

5. 考 察

今回調査を行った東北地方の私立大学生アスリートは、日常生活、競技生活いずれの場面においても相談行動を行っている割合が高かった。「相談行動は、相談することの羞恥心や負担感、自己評価の低下の予期で生じる「コスト」の評価と問題の解決、解消の予期によって生じる「利益」の評価によって左右されるため、相談行動は相談する「コスト」より「利益」が大きいと判断された場合に生じることが予測される」とする相川ら(1989)の研究を参照すれば、今回の調査対象となった東北地方私立大学生アスリートにとっては、日常生活、競技生活、いずれにおいても相談行動における「利益」を予期している人が多かったのではないかと推察される。

今回調査で明らかになった大学生アスリートの相談行動実態から、日常生活や競技生活それぞれの問題内容によって相談する、しないといった相談行動が変わることや「親」[学内の(部活の)友人・先輩]などの身近な存在を頼りに相談行動を行っていることがわかり、相談の内容や相談する相手によって「コスト」と「利益」

の予測評価が異なっていることが示唆された。

さらに、「日常生活を対象とした相談行動」と「競技生活を対象とした相談行動」の場面の違いによって、「相談行動」・「相談イメージ」・「コンディショニングの充実」の関係が異なっていた点が大学生アスリートの心の実態をよく表していたのではないかと考える。詳しく述べると、今回の調査では日常生活場面では相談行動や相談に対する肯定的なイメージがコンディショニングの充実に影響していたのに対し、競技生活場面では相談行動がコンディショニングの充実に影響しているとは必ずしもいえず、相談に対する肯定的なイメージとともに、自己中心性への回避姿勢を示すような相談に対する否定的なイメージがコンディショニングの充実に影響していることを示した。これらの結果は、これまで明らかにされていなかった。一般学生とは異なる大学生アスリートの心の内面を映し出しており、大学生アスリートの本質を理解する一助となるのではないかと考える。日常生活では「相談すると何かいいこと(利益)がありそうだから相談し、相談すると問題が解決に向かいコンディショニングも充実する」と考える一方、競技生活場面では「相談すると何かいいこと(利益)もあるかもしれないがその結果として何が(リスクが)あるかわからないし、誰にどう思われるかわからないから、相談することは慎重を要すること」という考えの中で、リスクの高い「誰かに相談する」行為より「相談せず、自力で解決する」もしくは「じっと耐える」行為を選択する方が心理的負担感が少なく、コンディショニングの充実につながっているのではないかと分析する。この競技生活における大学生アスリートの相談傾向は、土屋(2007)が相談者の供述を報告した「打ち解けられる人間関係を構築することが難しい」という大学生アスリート的心情を支持する結果ともいえる。その背景には、相談相手となる可能性の高い「学内の友人や先輩」が、競技活動を共にする仲間であると同時に、レギュラーの座を競い合うライバルであったり、競技志向性の異なる腹を割れ

ない存在であるため自分の弱い部分を見せられないという可能性もあると思われる。お互いの関係が利益相反関係にあっては相談するリスクが高くなることは予想されることである。

今回の調査結果では、東北地方の私立大学生アスリートは日常生活に関する相談行動と競技生活に関する相談行動において異なる心理的アプローチがあると示唆された。この結果から大学生アスリートの競技生活における相談行動は心理的に複雑で繊細な過程を経て行われることが予測されるため特に注視し、「安心して相談できる相手」がいるという安心感や「話してよかった」と満足感を感じられる支援体制を構築することが、重要であると考えられる。その支援体制の構築が大学生アスリートの心理的消耗やQOLの低下を防ぎ、コンディショニングの充実につながっていくと考えられる。

参 考 文 献

- 1) 相川充 (1989) : 援助行動 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一 (編) 社会心理学パースペクティブ I 個人から他者へ, 誠信書房, pp. 291-311
- 2) 独立行政法人日本学生支援機構 (2007) : 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」—
- 3) 福島章 (2000) : 親と子の自立を考える, 児童心理, 54(1), pp. 1-10
- 4) 五十嵐哲也・大野恵利香・小沢夏美 (2013) : 中学生の担任と養護教諭に対する相談行動における利益・コスト, 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, 第4号, pp. 9-16
- 5) 石山昭夫 (1995) : スポーツ少年団の現状と課題 月間社会教育, 国土社, pp. 17-22
- 6) 川上華代 (2013) : 現代学生の特徴と学生相談についての一考察 問題や症状が維持され変わらない学生の姿から見えてくるもの, 和光大学現代人間学部紀要, 第6号, pp. 141-153
- 7) 文部科学省 (2013) : 「スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業」
- 8) 森田美弥子 (2003) : 青年期における「相談する」行動の意味—大学生を対象として—, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 50, pp. 133-140
- 9) 日本学生相談学会 (2013) : 学生相談機関ガイドライン
- 10) 大石千歳 (2015) : 体育大学学生のスポーツマン的アイデンティティと職業決定ステータスが教職志望動機に及ぼす影響—全国大会出場経験の有無による比較検討—, 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 第50号, pp. 11-19
- 11) 大隈節子 (2013) : 学校運動部への所属経験が大学生のアイデンティティに及ぼす影響, 三重大学教育学部研究紀要, 第64巻, pp. 125-133
- 12) スポーツ庁 経済産業省 (2016) : 「スポーツ産業の活性化に向けて」
- 13) 武田裕子・石田弓 (2013) : 青年期における両親への相談行動について—利益とコストの予期, 親子関係に焦点を当てて—, 広島大学心理学研究, 第13号, pp. 191-209
- 14) 土屋裕陸, 高橋幸治, 今堀美樹, 荒屋昌弘, 前林清和, 菅生貴之, 石原端子 (2007) : 2006年度 大阪体育大学 学生相談室・スポーツカウンセリングルーム活動報告, 大阪体育大学紀要, 第39巻, pp. 247-263